

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

園田 浩司

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

狩猟採集民の学習における「教示の不在」—積極的関与はなぜ隠されるのか

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、学習主体としてしばしば記述される子どもを取り巻く大人に焦点をあて、彼らが学習にどのように貢献しているかを描き出すことを目的とする。ピグミー系狩猟採集社会の学習に関してはこれまで、子どもの活動が重点的に描かれ、それに関与するおとなに視点をあてられることはほとんどなかった。確かに乳幼児を対象とした関与はしばしば分析が進められてきたが (e.g., Hewlett 1991a; 1991b; Hirasawa 2005)、おおよそ 5~15 歳の子どもを対象としたものはまれであった。この理由として、おとながこれらの年代の子どもにあまり関わらず、一方の子どもたちは自発的に活動に取り組み、自ら知識や技術を獲得する (Kamei 2005; 亀井 2010) という、近代学校型の教育像との対比を背景としたかのような研究者の視線と、加えて平等主義 (Lewis 2008; Hewlett et al., 2011) 観念が作用していることが考えられる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

研究の方法

学習は「ある人がそこに居合わせるすべての他者のむきだしの感覚に接近でき、その人も同様となる、相互モニタリングが可能な環境」(Goffman 1964: 訳は報告者) である「社会的状況」で生起するものと定義する。本研究では、学習を知識の獲得といった内化と捉えず、学習者が作る実践に関する「一般的な全体像」(レイヴ&ヴェンガー 1993) の描写に重点を置く。以下、大人と子どもの日常的なやりとりに焦点を当て、子どもの参加を達成させるため、大人はどのように社会的状況を準備するかを追う。

結果

➤[事例] ネズミ探しⅠ

青年はネズミ (ジャイアントラット) 猟の際、葉をもぎ取るようある者に言いつけたが、子ども Au はまるで自分が指示されたかのように動き出した。すると青年は優しい声で「君は動かず、ネズミがどこから出るか計算して」と適切なリクエストを出した。青年は Au を社会的状況から排除せず、むしろその状況に引き込んだが、これが Au の作業能力に関わらず行われていることは注目に値する。

➤[事例] ネズミ探しⅡ

10 人程がネズミ猟をする横で、母 M とその子 Aw は少し離れたところにいた。このやりとりは M が Aw を狩猟に参加させる一連の過程を描いている。M はフェンドという青年期の女性に自分が見つけた巣穴を見に行くようにリクエストを出す。雑談をしていた彼女には届かず、今度は「いい？」と Aw の注意をひきつけた。注意したいのは、この呼びかけが子どもに変更されたという点だ。さらにこのとき Aw に宛てた「きみ」は強調表現 *ngamò* が用いられている。この後 Aw は実際に探し始めた。この社会的状況への引き込みを達成させているのは M にとどまらず、Aw が巣穴に向かうと、ある老女は M に Aw の応援に行くように促した。このように引き込みは、周囲の協力により達成されるといえる。

➤[事例] 獲物の解体

- 01 B: =そいつは h 鳴くんだ, ほんと. 「ムフー」って.
02 : 「ムフー」. で, この場所で. (僕), 僕達は切る.
03 : その[のどを]
05 S: [そいつは笑う.]=
06 B: =そいつは 鳴かない 「ミャオー」とは.
07 S: → そいつ鳴くんだ ほんと [「ムフー」って.]
08 B: [そいつ h] そいつは 鳴くんだ
09 ほんと h 「ムフー」って.

図. B と S による獲物の鳴き声に関する会話

次に大人が社会的状況を準備することで、子どもの自由な振る舞いが認められる過程を見る。子ども B が獲物の鳴き声を話題にしたのは、解体作業を手伝う最中だった。B は昨日、別の青年と狩猟に出かけその一部始終を見ていた。1 行目で B が、獲物は「ムフー」と鳴いたと報告すると、ナイフで獲物の腹を割いていた S はそれを繰り返す (7 行目)。この反復と共に興味深いのは、7 行目と 8 行目において角括弧で示された発話の重複だ。ここで B は S が反復することを予期しているかである。S の発話は、学校の教師によって行われる質問の形式をとらない。大人による子どもの発話の反復は、その発話を共同作業という社会的状況に適切なものとしている。

【結論・考察】(400字程度)

結論

本研究では大人がどのように社会的状況を準備し、子どもの狩猟活動への参加を達成させているかを分析した。事例から示された点は以下のとおりである。①大人が、当該の作業が進行する社会的状況から子どもを排除するのではなく、むしろ引き込もうとする、②社会的状況への引き込みが、当の大人のみならず、その周囲によっても支えられる、③大人が社会的状況を準備するなかで、子どもが自由に振る舞うことが認められる。

考察

学習者の社会的状況への引き込みは、同時に学習者自身の調整によっても達成されることは付け加えておかねばならない。このように考えると学習において子どもが学ぶこととして、当該作業に関する知識・技術と、他者と相互行為を共同で構築する能力の二つが考えられる。協同で相互行為を構築する能力は、相互行為能力一般としても重要なものであるが、また実践的な狩猟活動においても強く必要とされるといえる。森の中で頻繁に目撃されるネズミ探しや掻い出し漁は、どちらも集団猟としての性質が強い。こうした集団行動の内部で繰り返される、周囲と子どもの相互行為上の互いの配慮が、子どもの能力を形成する支えとなっていると考えられる。

参考文献

Goffman, E.

1964 The Neglected Situation. *American Anthropologist*, 66(6) :133-136.

Hewlett, B.

1991a Demography and Childcare in Preindustrial societies. *Journal of Anthropological Research* 47(1): 1-37.

Hewlett, B.

1991b *Intimate Fathers: The nature and context of Aka Pygmy paternal infant care*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.

Hewlett, B., Fouts, H., Boyette, A., and Hewlett, B.

2011 Social learning among Congo Basin hunter-gatherers. *Philosophical Transactions. Biological Sciences* 366: 1168-1178.

Hirasawa, A.

2005 Infant care among the sedentarized Baka Hunter-Gatherers in southeastern Cameroon. In Hewlett, B. and Lamb, M (eds.), *Hunter-Gatherer Childhoods: Evolutionary, Developmental & Cultural Perspectives* (pp. 365-384). Aldine Transaction.

Kamei, N.

2005 Play among Baka children in Cameroon. In Hewlett, B. and Lamb, M (eds.), *Hunter-Gatherer Childhoods: Evolutionary, Developmental & Cultural Perspectives* (pp. 343-359). Aldine Transaction.

亀井伸孝

2010 『森の小さなくハンター>たちー狩猟採集民の子どもの民族誌』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

レイヴ,J./ ウェンガー,E. 佐伯胖 (訳)

1993 状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加 産業図書

Lewis, J.

2008 *Ekila: blood, bodies, and egalitarian societies*. J. R. Anthropol. Inst. 14: 297-335.